

佐伯一麦『空にみずうみ』

大丈夫だ、オレ

阿部公彦

群像さん、ありがとう。「美しい日本語」なんて自分では恥ずかしくてつけられないタイトルで、そもそも文章は「汚れ」こそが勝負だと思ってきましたが、ちょうどいい機会です。考えてみました。

文章には甘いものも苦いものもある。硬いものや、にゆるにゆるしたもの、べととまとわりつくものもある。文章には人間の魅力やイヤらしさや生理や情念がくっついていて。だから、きれいな事ではすまないし、きれいな事ですまそうとしている文章はちっともおもしろくない。

ただ、ときに思わず「美しい文章だ。いいね」と言いたくなることもある。不思議ですがしきを持つた文章。群像さんはこれを狙っているのかな、と私は思う。それはいったいどんなときでしょう。「甘いね」でも「硬いね」でも「ゆるゆるゆるゆるゆるゆる」でもなく、「美しいね」。そんなと

ばかりなのですが、いやいや、まるですばらしい太陽に照りつけられたかのよう。小説を読んでいることすら忘れそうになります。

具体的にみてみましょう。サンブルはごく地味な箇所です。この作品に無数にちりばめられた「風景との出会い」を描いています。視点人物は主人公早瀬の妻の柚子です。その柚子が少しずつ世界の中へと溶けこんでいくプロセスに注目してください。

幼稚園のサツマイモの畑の向こうには、桐の木が何本もあり、初夏になると、遠くに薄い紫色の花をいくつもつける。その先の、駐車場になっている広い空き地の脇は、雑木林になっていて、杉や小檜などを葛が覆い尽くして、さながら「葛の木」だ。

その雑木の中に朴ホトの木があり、桐の花と前後して、白い大きな花をつける。合歡の花の甘い匂いに似ているが、もっと香りが高貴で力強く、遠くまでにおどく。一度花を持って帰りたいと思うけれど、背の高い木で、遥か上に花があるので、叶わない。朴の花の、ほんの少し黄みを加えた、たっぷりとした気品がある白を、柚子はとて気に入っていた。

一つ一つの呼吸を愛おしそうに行っている意識がここにはあります。呼吸の継ぎ目は細かく、何かをじっくり積み上げ

き、ほんとうに美しいのは何なのか。「美しい日本語」は私たちの立ち会いなくしては出現しません。すばらしい太陽が照りつけたとき、すばらしいウナギを食べたとき、すばらしいタックルを目撃したとき。みんな同じです。出来事として遭遇し、受け入れる。そこには必ず「私」がいます。文章だけが勝手に美しいのではない。美しい文章は、まるでウナギのように私たちの中に入ってきて内臓をもみほぐし、「おお。今、このオレは美しい！」という変な気分にしてくれます。大事なのは「大丈夫だ、オレ」という「張り」ではないでしょうか。「オレの横溢」です。そんな心地をもたらしにくれるのは、英語ならワーズワース。「不滅のオード」や「ティンターン寺院」や「序曲」など、その所要所で、実に簡単な言葉を遣っているのに——ぎこちなくさえあるのに——すうっと呼吸が通り、透明な微風が身体を隔々に行き渡り、目がくらくらして自分が文章を読んでいるのか書いているのかさえ判然としなくなる。「オレは美しい」という、変な瞬間が到来するのです。

呼吸というものは、キスするときもそうですが、相手と自分の中に呼びこみ、自分を相手へと送り出す。だからこそ、どっちがどっちかわからなくなる。日本語でそんなことを可能にする書き手として思い浮かぶのは、佐伯一麦さんです。「空にみずうみ」なんて、買った机が大きすぎて部屋に入るか入らないか、たいへんだ、みたいなおそろしく地味な話題

ている。ただ、いろいろな植物に目移りしているうちに、何か視線はわずかに迷子になって、でも受け身だけではない、「さながら」と見立てたり、匂いを嗅いだり、花を欲しがったりしながら、積極的に風景に参加しています。そんな流れの果てに最後の「たっぷりとした気品がある白を、柚子はとて気に入っていた」まで来ると、こんな単純な一節なのに、世界に身をまかせるような「うわぁーっ」という一体化の歓びがはじける。

実はこの作品の底流には「鬱」の記憶があります。主人公の早瀬にとって、鬱は世界との断絶でした。鬱になると「自分の心の中にしか、思いも目も耳も向かなかった。その状態から逃れられたときに、周りのけしきに目が向かうようになり、音が聞こえるようになってきた。その順番は逆だったかもしれない。ともかく、こうして自分を取り巻いているものが見え、聞こえているうちは大丈夫だ、と早瀬は思う」。

なるほど、と思います。地味なようですが、佐伯さんの風景描写にはかろうじて世界の色や匂いを自分のうちに取りこめるといって、奇跡的な達成感がにじみ出しているのです。かろうじて息をつぎ、言葉をつみあげるので、だんだんと相手なのか自分なのか世界なのか、妻なのか夫なのか、その境界がわからなくなる。いつの間にか私たち読者もそんな呼吸の瞬間です。群像さん、ほんとうにありがとう。大丈夫だよ、オレ。